

新年のご挨拶

新年あけましておめでとうございます。日頃から暖かいご支援ご協力を賜り、心からお礼申し上げます。年頭にあたり、学長として一言ご挨拶申し上げます。

昨年は学長一年目ということもあり、静岡大学及び静岡にゆかりのある人々について、公の場でポジティブに語る機会をできる限り増やそうと努力しました。折にふれて浜松高等工業学校初代校長の関口荘吉先生とお父様で初代静岡県知事の関口隆吉氏の静岡大学及び静岡県の発展に対する多大なご貢献をご紹介してきましたのも、また静岡学問所教授であった中村正直が『西国立志編』という表題で翻訳したスマイルズの著書 **Self Help** が、自らの力で事業を起こし立身出世を果たそうとする明治の青年たち—そのなかには若き豊田佐吉や **SF** 作家星新一氏のお父様で星製薬創業者の星一氏等も含まれていたわけですが—を鼓舞する上でいかに大きな役割を果たしたかを強調しましたのも、このような意図に基づくものでした。

先日行われた今年度の高柳賞の授賞式では、浜松電子工学奨励会の畑中理事長から高柳健次郎という名前も若い世代の間では次第に忘れ去られようとしているというお話しがあり、我々の偉大な先達の業績について常に語り継ぐことの重要性を改めて認識しました。今年も引き続き静岡大学及び静岡という地にまつわる魅力ある物語を積極的に提供し、本学の教育・研究、産学・社会連携、国際化、地域人材の養成等の現時点での様々な取り組みや成果とこのような歴史を結びつけることによって、本学の学生・教職員が誇るべき歴史的伝統の上に立って未来に進もうとしているという姿勢を学内外に示して行きたいと考えています。

さて国立大学に対しては、かつてないほど地方創生、グローバル化、イノベーション・産学連携等の多様な分野での人材養成、地域貢献・社会貢献を求める声が高まって来ています。本学も **COC+**事業、**ABP**、イノベーション・エコシステム等の多様な取り組みを通じてこのような期待に応えるべく努力を重ねて来ましたが、本年4月からは浜松医科大学との共同大学院「光医工学共同専攻」が新たにスタートし、有力な成長分野である光研究、医工連携の推進に向け、重要な一步を踏み出すこととなります。また第3期中期目標・計画期間の後半に向け、教員養成・工学系教育の改革、大学間連携の推進、アジア諸国との教育・研究両面での関係強化等に向けた、教育研究組織の改組、新たな教育プログラムの導入等に取りかからなければなりません。

冒頭でご紹介しました中村正直が「天ハ自ラ助クルモノヲ助ク」と訳したスマイルズの言葉 **Heaven helps those who help themselves** の意味についてですが、この言

葉はしばしば人間相互の助け合いや弱者の権利の尊重を否定する「強い個人」の道徳を示すものとして解釈されてきました。しかし若きスマイルズが、苛酷な労働条件の下にあった英国の労働者たちの権利尊重を求めて 19 世紀半ばに大きな盛り上がりを見せたチャーチスト運動の担い手であったことからわかる通り、彼は社会的な条件を無視して「ひとり一人の個人が頑張りさえすれば何でもできる」といった非現実的な主張をしたわけではありません。彼の主張の核心はむしろ、チャーチスト運動のような社会運動の成果によって、ひとり一人の個人のイニシアチブ次第で、地位や身分に関わりなく何事かを成し遂げることができる時代がいよいよやってきたのだというところにあります。『西国立志編』のなかに登場するアークライトやウェッジウッドといった自らの工夫と努力だけによって事業を起こした人々の実像が明治の青年たちを奮い立たせたのも、明治維新によって達成された四民平等の社会の下で、自分たちの工夫や努力もまた報われる条件が与えられたのだという実感があったからに他なりません。

大学というこの古い歴史をもつ組織が今様々な困難の下にあることは事実ですが、それでもなお「天ハ自ラ助クルモノヲ助ク」の精神によって新たな可能性を開く条件は大いにあると私は考えています。大学の全構成員がそれぞれのイニシアチブを十分に発揮し、静岡大学を少しでも良い大学にして行くことができるよう、学長としてできることはなんでもやろうと思っていますので、是非学内外の皆さんからの幅広いご理解ご協力をいただけますよう、よろしくお願い致します。

2018 年 1 月 4 日
静岡大学長 石井 潔